

大学生による地域の価値共有プログラムの実践

須賀由紀子（実践女子大学）・土屋薫（江戸川大学）

Keyword： まちあるき、地域愛着、大学生

【研究の背景と目的】

少子高齢化の進展、本格的な人口減少局面を迎える中、住民がつながりあう地域社会形成は、重要な行政の課題である。そのためには、地域づくりの主体者となる人的資本の蓄積が大切になる。「加入率減少、不要論も…「町内会」は変わるか自治会加入者の低迷」（読売新聞、深読み2018.11.4）に指摘されているように、町会・自治会による地域コミュニティの力は弱体化しており、地域に愛着を持ち、地域を大切に考える人を形成するためには、意識的なしかけづくりが必要といえよう。

このような問題意識を背景に、筆者らは、これからの地域社会の担い手となる大学生に着目し、地域愛着を感じる若者の育成を目的とする「まちあるきプログラム」の開発に取り組んできた。本研究は、このプログラムの展開を振り返り、その成果の中から、地域価値共有プログラムのあり方への知見を得ることを目的とする。

【研究内容】

本研究において対象とするプログラムは、生活科学部現代生活学科に所属する J 大学学生および社会学部現代社会学科レジャーコースに所属する E 大学学生が一つのチームとなり、自分たちが日頃学んでいる「豊かに生きる」「よりよい地域社会づくり」という視点を活かし、高校生に、地域を学びのフィールドとすることの面白さや大切さについて気づいてもらう「高大連携教育プロジェクト」の中で生まれたものである。プログラムに参加する高校生にとっては、大学での学びに直接触れる機会となる。一方、大学生にとっては、高校生に教える経験を通して、自身の学びの意義や学び方を学修することができる。J 大学・E 大学双方の3年生のゼミ活動として、2017年度から両者共同でプログラムを実施している。毎年度、新しい学生メンバーでプログラムを短期間で作成し、企画力、行動力、プレゼンテーション力、論理的考察力など、社会人基礎力に関わる総合的な人間力を高めるアクティブ・ラーニングのプログラムでもある。

プログラムの基本型は、「地域」のフィールドに出て、まちの魅力に気づきをもたらす「まちあるきプログラム」を大学生が考案する。そして、実際に、参加高校生と一

緒にまちあるきのフィールドワークを行う。高校生にとっては、基本的に縁もゆかりもない土地を歩くので、完全にビジターとして、その地域の「らしさ」に触れることになる。そして、歩いた地域についての印象、発見したことや理解したことなどを、大学生と高校生が話し合いながらまとめ、パワーポイントやポスターで発表する。さらに、高校生の意見を、大学生が地域住民にフィードバックする。

以上を、これからの地域づくりという観点から概念化すると、大学生が要となって、一方で高校生に対して、また地域住民に対しても、地域の価値の共有を行う機会を持つことで、地域の暮らしを大事に考える人を意識的に増やし、地域における信頼関係や互酬関係、ネットワークといった社会関係資本を循環的に形成していくループを作るといえる（図1）。

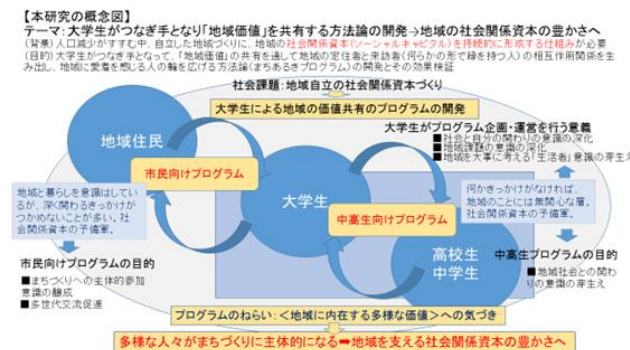


図1.本研究の概念図

本プログラムは3年目を迎え、高校生向けだけではなく、中学生とのプログラム、高校生の意見から刺激を受けた市民による新しい活動などの展開を生んでいる。

そこで本研究では、1) 先行研究をもとに、地域愛着をはかる方法としてまちあるきを位置づけ、2) プログラム展開を振り返り、本プログラムの可能性を検討する。さらに、3) プログラムに参画した高校生および設計者である大学生の意識変革について、①大学生自身は、地域づくりに対してどのような意識を持ったか ②一緒に行った高校生（中学生）が、どのように地域に対する意識を持ったか ③地域住民にどのような影響を与えたのか、の3点から検証し、本プログラムの意義を考察する。

【研究結果】

1) 先行研究から

①まちあるきについて

「まちあるき」は、散歩（ウォーキング）でもなく、日常生活の中の徒歩行動でもなく、「まちをぶらぶら歩きながら、自分で街を見たり感じたりして楽しむこと」と定義される（海野 2013）。2006 年の「長崎さるく博」の登場は、観光における「まちあるき」の先駆けとなった。その後、東京都市市長会の資料によれば、「自治体単位でコースを設定し、オリジナルのマップをもとにガイドが案内する」といったスタイルのまち歩きを実施している自治体は 161 件にのぼる（東京都市市長会 2015）。一方、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所・都市魅力研究室が 2014 年に始めた Walkin' About では、案内人ガイドはなしで、まちあるきに集まった人たちが、あるエリアを自由に 90 分間歩き（歩かずに、カフェや居酒屋などでのんびり過ごしてもよい）、それぞれが感じた体験を語り合うことで、高い満足度が得られるプログラムになっているという（山納 2019）。

つまり、「まちあるき」は、地域の価値を共有しようとする「価値共有」の営みと捉えられ、長く住んでいる人にとっても、新たに住み始めた新住民にとっても、また、観光の一時的な来訪者にとっても、「まちあるき」をしてその土地の人や歴史・自然やまちなみを体感することで、対象とする地域に対してある種の感情を持つことができる。そこでよい体験をすれば、まちあるきは、その土地に愛着を感じる「関係人口」を増やす仕組みと捉えることができる（土屋・須賀 2018）。

②地域愛着について

「地域愛着」とは「人々と特定の地域をつなぐ感情的な絆」であり、地域に高い愛着を持つ住民は、地域活動に積極的に参加し、住民の協力的行動も促されることが報告されている（引地他 2009）。地域への愛着形成は、まちの住みやすさ、社会関係資本の醸成に関係を持つといえる。海野（2013）は、長崎さるくの研究を通して、まち歩きやまち歩きイベントへの参加は、地域に対して感情的な絆を生み、地域愛着の醸成に影響を与えることを示している。また、小学校の生活科教育において、「町探検」をして地域の中にいる人に直接かわり、楽しい思いをし、地域に対する「肯定的な印象」を持つことが、子どもの地域愛着に影響し、それは大人がもてる「地域への愛着」の基盤となることが報告されている（山本 2016）。

以上を踏まえると、地域愛着は、住みやすい地域づく

りのために重要であり、その地域愛着を醸成する方法としてまちあるきは有効であり、子ども・若者が体験するまちあるきは、長じて地域愛着の意識へとつながる有効な手段として位置づけることができる。

2) 本プログラム展開

①2017 年度（1 年目）

本研究の大学生による「まちあるき」プログラムでは、地域の価値共有の手法として、目に見える景観の印象を数値化して捉える「SD 法」、土地に住んでいる人の思いを聞く「インタビュー法」、地域の人々が、どのように行動しているのかを観察する「観察法」の組み合わせを採用した。これは、大学生の話し合いの中で生み出された。

まちあるきのフィールドとしたのは、H 市 N 地区である。H 市と J 大学は、地域づくりにおいて協力関係にあり、H 市 N 地区住民によるまちあるきの活動に、J 大学学生が参加しており、市民の地域への思いも伝えやすく、土地勘があったことがその理由である。

この地域は、「都会と自然のよさの両方を持ち合わせている」という特徴を持っていることから、「わくわく感」「まったり感」の二つの軸と、関連で考えられる「自然」と「地域」の二つの軸の計 4 つの軸で、SD 法調査票の形容詞対を学生たちが考えた（図 2）。また、「インタビュー法」の実施場所としては、長年この土地で自転車店を営んでいる店主に思いを聞いた。さらに「観察法」としては、この地域が「パン屋激戦区」であるところから、2 つの対照的な特徴を持つパン屋を同時に観察して、利用者男女比と人数、また、どのような買い物をしているのか、定点観測を行い、まちの特徴を探った。



図 2. SD 法調査票

以上のまちあるきをした結果をもとに、この地域内のポイントの「わくわく度」「まったり度」をグラフにして示し、高校生がまちあるきで感じた地域の印象のコメントを加えてマップに表した（図 3）。



図 3. 作成したマップ

まちあるきは、半日程度、まとめて約 1 日かけた内容であったが、高校生による発見・指摘は的確にまちの特徴を示しており、また、高校生と大学生が捉えたまちの印象の内容について、SD 法を用いることで、地域住民との「対話」を実践する「共通言語」を手に入れることができた。これまでの N 地区住民によって提唱された「わ

くわく」と「まったり」という「まち」を捉えるキーワードがある程度有効であったことが確認されたことになる。そして、大学生・高校生が得た「直感」を、住民を含めた当該地域に関わる人々の「直観」として絶えず再構築していくことで、生きたまちづくりにつながることを示唆された結果となった（土屋・須賀 2018）。

さらに、この内容を、J大学学生がH市民にフィードバックした結果、J大学学生が主体で運営する市民向けまちあるきツアーが実施される運びとなり、市報で広報された。本プログラム実施にあたり、J大学学生は、事前に市民の方と予定ルートの実踏を行い、当日は、約20名の一般市民の参加者を得て、観測地点における「高校生の気づき」を記載した用紙を参加者に配布し、その用紙に、参加者自身も感想を書いて、高校生の感性との対話を楽しみながらまちあるきをした。まちあるき後には、まちあるきをしての印象を話し合い、地域の価値共有を行った。

②2018年度（2年目）

新チームで臨んだ2年目は、まちあるきの内容を「SD法」と「インタビュー法」の2つに絞った。同じH市N地区のフィールドの中から、より自然が豊かに残る、静かさ・のどかさのある区域をルートに選び、SD法で「レトロ感」を測定しつつまちあるきをするというプログラムを考案した。インタビューでは、シャッター街化している商店街の中で、今も個人精肉店を営業している店主に、まちへの思いを聞いた。また、今回のルートの特徴として、坂が多くあることから、「坂」を一つの地域資源ととらえ、高校生が坂にユニークな名前をつけて発表した。最終的には、SD法で計測した地点のレトロ度をレーダーチャートにし、その地点の感想コメントを添えたインスタグラム風のレトロマップを作り、発表した。



図4.マップを市民に紹介

高校生と大学生が創ったまちあるき結果のマップを、

J大学学生がH市民にフィードバックした結果(図4)、「坂に命名するまちあるき会」が、市民によって企画実施されることになった。一般募集をしたところ、小学生から80歳代のお年寄りまで参加があり、「坂の名前をつけて歩く」というまちあるきを通して、大学生を媒介として、地域に目を向ける多世代のつながりが生まれた。

さらに、「高大連携まちあるき」のプログラムを、J大学学生が、地元中学生を対象に、中学生用にアレンジして行った。内容は、地域の大人が「居場所」(居心地のよ

いおすすめポイント) と思っているところと、中学生が自分達にとって「居場所」(居心地のよいおすすめポイント) と思っているところを歩き、「居場所感」をはかるSD法の形容詞対を考えて、大人と中学生の居場所ポイントの居場所感を計測し、振り返りを行った。本プログラムの実施にあたっては、社会教育施設である公民館を通じて、地元中学校との連携、および児童館の連携に関係が広がった。

③2019年度（3年目）

2019年度については、継続中であるが、「いつでも」「どこでも」「誰とでも」実施することのできる、地域の価値共有のためのコアプログラムづくりと共有スケールの開発に、新たなチームで取り組んでいる。

以上の展開をまとめると図5のようになる。

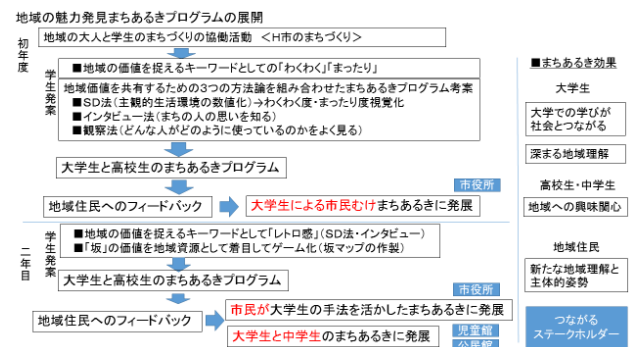


図5.プログラムの展開

大学生による高校生向けプログラムの実施により、プログラムは多岐に広がった。初年度は、大学生が実施者となって市民向けに、2年目は、大学生のプログラムを市民が行うことに、また、大学生が中学生にプログラムを実施する、という形での広がりをみた。大学生を要として、世代がつながるループが生まれ、また地域のステークホルダーのつながりも広がっている。地域の中の点をつなぎ、地域に関わろうとする人が増えた形になっていることは、このまちあるきプログラムの可能性を示唆している。

3) プログラム参加者の地域意識の変革

このまちあるきプログラムは、大学生・高校生・中学生という若い世代の地域理解に、有効な手立てとなっているかどうか。それを確かめるために、2017年度には大学生に対して、また2018年度には大学生・高校生・中学生対象に、事後アンケートを行った。

①大学生の意識について

初年度のアンケートの中では、参加した大学生 (N=5) に、プログラムへの参加を通して得られたことは何かを

5点満点で聞いた。その結果、「調査対象地に対する理解が深まった」「地域の課題を見つけることができた」が特に得点が高く、地域に対しての感情を持つことができるプログラムであることが確かめられた（図6）。

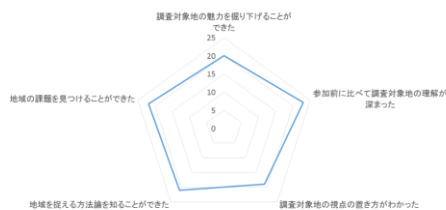


図6.大学生の地域への意識変化（得点）

②参加した高校生・中学生の地域意識

二年目には、高校生に対して、まちの魅力を捉える視点として「ひと・歴史・自然・まちなみ・ライフスタイル」の5つのポイントについて、どの程度感じるプログラムであったかを聞いたところ、「歴史」「自然」に対しての振れ幅が若干大きく、ルートの特徴であるレトロ感が捉えており、地域特性を知る方法としての適性が確かめられた（N=大学生 6、高校生 6）。また、高校生のコメントの中に「まちと生活はつながっている」「その土地の特性を活かして生活している」という言葉があり、このまちあるきの内容が、単なる風景探索ではなく、暮らしを感じさせるプログラムとなっていることを示唆するものとなった。（土屋・須賀 2019）。

また、地元中学生にとって、日頃慣れ親しんでいる地域のまちあるきがどのような意義があるのか、自由記述をしてもらった（N=6）。その結果、面白かったこととして、「街を実際に歩いてみて、わからなかった魅力が見えた」「普段行かない場所に行ったこと」などがあがり、日頃は生活圏の中にある施設や場に目を向けていないことがわかった。「プログラム全体」を通して一番学べたこととして挙げたのが、「まちの小さな良いところや今まで気づかなかったよさ」「地域の魅力」「建物の詳しい理由」で、身近な地域を知ることの意義がうかがえる結果となった。

高校生、中学生ともに、プログラムの満足度は高かったが、今回の参加の高校生は県外者、中学生は地元者で、両者を比較してみると、地元中学生の方がプログラムの満足度が高く、また、自分の地域を振り返るきっかけになったとする人が多かった（図7）。

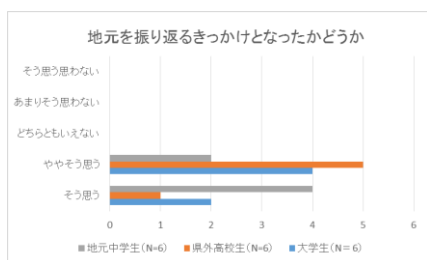


図7.大学生・高校生・中学生の受けとめ（人）

以上まとめると、プログラム考案者・実施者である大学生は、地域への関心の高まりや学びの意識の明確化がみられ、プログラム受講者である高校生、中学生は、まちあるきを通して自分の地域に目を向けており、本プログラムを通して、地域への愛着意識が芽生えていることがうかがえた。

③市民の意識について

大学生によるプログラムのフィードバックを受けた市民が、刺激を受けて、意欲的な地域活動の展開へとつながったことは、2) に述べたとおりである。

【考察・今後の展開】

まちあるきの考案・実践のためには、地域をよく知る必要がある。自分たちが困った地域の魅力を、高校生・中学生に伝えようとする学生の姿勢から、地域の価値再発見のプログラムが生まれた。また、「SD法」を採用したことにより、地域の「らしさ」を捉える共通言語となり、異世代間で地域の価値を共有することができた。一方、高校生・中学生にとっては、大学生による運営である点、インタビューをして直接地域の人に触れる経験が、学校の先生や地域の大人とは違った新鮮さとなり、地域に興味を持つプログラムに力を与えたと考えられる。

このように、今回大学生が考案した「SD法」を含むまちあるきプログラムは、世代をつなぎ、地域に愛着を感じる人を増やす可能性がある。今後、さらに別の地域での実践も予定しており、大学生による地域価値共有プログラムとしての汎用性を確かめていきたい。

【引用・参考文献】

- ・海野碧（2013）、まち歩きが地域愛着に与える影響に関する研究、東京大学都市交通研究室
- ・土屋薫・須賀由紀子（2018）、若者による地域の「見どころ」把握に関する基礎的研究、江戸川大学紀要(28)、327-335、
- ・土屋薫・須賀由紀子（2019）、地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築、江戸川大学紀要(29)、305-313
- ・東京都市長会、多摩地域における「まち歩き」のすすめ、2015
- ・引地博之・青木俊明・大淵憲一（2009）、地域に対する愛着の形成機構、土木学会論文集 65(2)、101-110
- ・山納洋（2019）、歩いて読みとく地域デザイン、学芸出版社
- ・山本銀兵、加納誠司、「地域への愛着」形成過程に関する一考察（2016）、愛知教育大学教職キャリアセンター紀要（1）17-25